

【パネルディスカッション報告】

台湾史研究の動向と課題 — 学際的な台湾研究のために —

駒込 武

はじめに

第1節 台湾史研究の動向

第2節 台湾史研究の課題

まとめに代えて

(要約)

本稿は、台湾研究においてディシプリンの枠を越えた対話を展開する契機をつくるための試論である。具体的には、まず最近10年間の日本における台湾史研究を概観し、政治史的研究が抗日運動史を含めて意外と少ない一方、教育史や文学史の研究の中でも「抗日」の意味合いを問う研究が表れていることを指摘した。次いで、簡吉・簡明仁親子の足跡を一つの参照点として、シンポジウムにおける他のパネラーの研究に対して問題提起を行った。こうした作業を通じて、一見すると無関係に思われる研究が相互に関連していることを示すとともに、もはや「帝国主義」というような言葉が自明のリアリティーを持ちにくい状況で「抗日」あるいは「反帝国主義」という観点から台湾史研究を再構築していく可能性を検討した。

はじめに

まず簡単に最近10年間の台湾史研究の動向を概観した上で、「台湾研究」の学際性という観点をふまえながら今後の課題について論じることとしたい。今回のシンポジウムでは、「政治」「経済」「社会」「文学」「歴史」という領域分けに即してパネラーが選ばれているが、「歴史」は一方で固有のディシプリンを持つ学問領域であると同時に、他方で、「政治史」「経済史」「社会史」「文学史」という言葉が示すように、さまざまなディシプリンがそれぞれの関心に応じて採用する手法でもある。かつて若林正丈が本学会の創立大会で指摘したように、台湾研究が「諸ディシプリン・隣接分野から投げかけられ重なる濃淡の異なる網のつらなりが形成する地域研究」¹であるとすれば、日本台湾学会は「網のつらなり」をより密なものとしていくための場となりうるだろうし、歴史研究はディシプリンの枠を越えてお互いに問いを投げかけ合うための結節点となりうるだろう。そのように考えて、本稿では歴史学プロパーの領域の動向を綿密に確認する作業よりも、あえてディシプリンを異にする他のパネラーの研究への疑問を提起し、その往還関係の中で台湾史研究の「課題」を明確化することを目指したい。

第1節 台湾史研究の動向

まず最近10年間の台湾史研究の動向について最低限の確認をしておきたい。ただし、以下に述べるのは、基本的に「日本における台湾史研究」（この場合の「日本における」とは日本の出版社等から日本語で刊行されたという意味であり、台湾人によるものを含む）の動向である。台湾

史を専攻する者として「台湾における台湾史研究」を無視できないことはもとより自覚している。だが、自分自身の個別研究に関わる領域を越えて「台湾における台湾史研究」の全体像を把握することは筆者の能力をはるかに越えている上に、日本台湾学会という場が日本を拠点としたネットワークであることからこうした限定もやむをえないと判断した²。

本稿末の資料1は、1998年から2008年5月までに日本で刊行された台湾史関係の学術書（単著のみ）の一覧である。単著に限定したのは、編著まで含むと個人での調査は難しい上に、若手・中堅の研究者による研究動向——特に学位論文の出版状況——を浮き上がらせたいと考えたからである。ジャンル分けについては「政治史」「経済史」「教育史・宗教史・言語史」「社会史・女性史・民族誌」「文学史」「翻訳書」という暫定的な区分を設けた。「政治史」「経済史」以外は「文化史」として総括することもできるが、「教育史・宗教史・言語史」は文化政策として政治史的傾向の強い領域と考え、「社会史・女性史・民族誌」と区別した。したがって、宗教関係でも神道に関するものは前者に、漢人の民間信仰に関するものは後者に分類している。

ジャンル別の動向に関しては、「政治史」「経済史」の領域に属する著作が意外と少ないことが注目される。ただし、これは単著に限定したためでもある。共著を射程に入れるならば、檜山幸夫編『台湾総督府文書の史料学的研究－日本近代公文書学研究序説』（ゆまに書房、2003年）ほか、台湾総督府文書の目録作成に携わってきた人々による研究が数多く刊行されている。史料の体系的整理こそが歴史研究の持続的発展の基盤である以上、その重要性はいうまでもない。資料1にあげた単著の中でも、大友昌子『帝国日本の植民地社会事業政策研究』（以下、資料1に挙げた単著については発行者・発行年を省略する）のように目録編纂の成果を着実にふまえたものが表れてきている。また、膨大な植民地官僚群の実態を解明した岡本真希子『植民地官僚の政治史－朝鮮・台湾総督府と帝国日本』も、植民地期の台湾史を研究する者が必ず参照すべき基礎研究としての性格を備えている。

「政治史」には抗日運動史関係のものも含めたが、若林正丈による古典的な著作の増補版のほかは、翻訳書の中に謝雪紅や霧社事件に関する研究が含まれる程度である。ただし、「教育史」「文学史」などに分類した著作の中にも実は「抗日」の意味を問い返したものがみられる。たとえば、陳培豊『「同化」の同床異夢－日本統治下台湾の国語教育史再考』、北村嘉恵『日本植民地下の台湾先住民教育史』、垂水千恵『呂赫若研究』をそうした例として挙げることができる。総督府の設置した教育施設への忌避と選択的受容、あるいは文学作品の執筆など組織的な抵抗とはみえない事態にも「抗日」的な要素は見出せるのであり、全体として、「抗日」の意味合いが変容・拡大しながら、抗日運動史研究が深化してきているとみることもできる。以下では、他のパネラーの研究へのコメントという形式を通じて、異なるディシプリンの対話の可能性を問いつつ、「抗日」という「古典的」主題が今日どのような形でアクチュアリティをもちうるのかを考えることにしたい。

第2節 台湾史研究の課題

1. 「現実に台湾に住む人々」の経験から発すること

松田康博は、台湾における中国国民党の一党独裁体制の成立過程について論じた著書において、「時空の境界を超えた」研究の必要を次のように説いている³。「一九四五年と四九年の時間的境界を越え、中国大陸と台湾という空間的境界を越えた先行研究は、やはり極めて僅少である。ところが、現実に台湾に住む人々に会えばわかることであるが、本省人であれ、外省人であれ、彼らの人生や国家・社会の歴史が、一九四五年や四九年で途切れたり、あるいは過去を白紙にして再出発したりしたわけではない」。

1945年の日本敗戦、1949年の国民党・中華民国政府（国府）の台湾撤退という政治的事件により、台湾における統治者集団のあり方は大きく変わった。だが、松田の指摘する通り、そうした事件により、台湾に居住する人びとの生活がそれ以前とまったく断絶してしまっただけではないし、芝居の舞台が回転するように従来の歴史がリセットされたわけではない。多くの人びとが、「国語」の変化などによる戸惑いや、家族の喪失・離散による悲しみを経験しながらも、営々として台湾での生活を築いてきた。これは当たり前のことであるが、その当たり前のはずのことを何度でも確認しなくてはならないところに、台湾研究の独自性があるともいえる。筆者自身を含めて日本による植民地支配下の台湾史を研究する者は、総じて、「戦後」——特に1949年以後——の台湾史にはほとんど関心を向けてこなかった事実があるからである。日本統治期の公文書の言語は日本語で書かれているのに対して、戦後は中文であるという資料の性格の相違も、こうした研究上の分断を促進する一要因となってきた。さらに、政治研究、経済研究、文学研究などのディシプリンに応じて生活の中の異なる側面に関心を払うのみならず、ディシプリンによって対象とする時期も偏りがちである——たとえば文学研究者の関心が1930年代～40年代に集中しがちであるのに対して、経済研究者は1970年代以降をとりあげることが多い——という問題も存在する。結果として、個々の研究を積み重ねても、「現実に台湾に住む人々」の経験にはなかなか迫ることができない状況が生じている。もとより、個人の研究で可能な作業は限られており、なんらかの時空やディシプリンの限定はせざるをえない。それにしても、自分自身の研究における対象の切り取り方、その限定性を自覚し、また相対化するための議論のアリーナ（舞台）を構築する必要がある⁴。

以下では、こうしたアリーナを構築していく可能性を検討するための一つの試論として、簡吉・簡明仁親子の足跡に即して、台湾史研究をめぐる課題を考えてみることにしたい。ここで特定の親子の歴史をとりあげるのは、対象とする時期もディシプリンも異にする研究者が実りある対話を展開するためには、できるかぎり個別具体的な「事例」——もとより、個々人にとってそれぞれの人生は「事例」などではなく、それ自体としてかけがえのないものなのだが——に即して議論することが必要だという方法意識による。しかも、現実に1945～49年前後に人生を断ち切られた人々も少なくない以上、「現実に台湾に住む人々」の経験という問題提起を受けとめるためには、二世代以上の軌跡を追う必要があるという判断に基づいている。

それにしても、なぜ簡吉・簡明仁親子の「事例」に着目するのか。その理由について述べるに先立ち、ふたりの足跡を簡単に確認しておこう。

簡吉は、1903年に鳳山で生まれた。父簡明来は、わずかながらも自己の土地を持つ自作農だった。簡吉は、1921年に台南師範学校を卒業して鳳山公学校教員となった。当時の台湾の教育制度や民族別の職業分布を想起すれば、ローカルなレベルのエリート層に属したと言ってよい。だが、——法廷における簡吉自身の表現を借りるならば——農民の「惨憺」たる生活に「無限の傷心」⁵を感じたため、25年に教職を辞して鳳山農民組合の結成に参加し、さらに26年に全島的な農民組合が組織されると中央委員長に就任した。28年以降、農民組合に台湾共産党（以下、台共）の影響力が浸透し始めると台共を支持し、のちにプロレタリア文学作家となる楊貴（楊逵）と袂を分かった。29年に農民組合幹部の一斉摘発において検挙・投獄され（禁錮1年）、31年には台共関係者の一斉摘発で再度検挙・投獄された（禁錮10年）。簡吉の投獄以降、妻の陳何は助産士としての資格を得て生計を立て、3人の子どもを育てた。42年に出獄、日本の敗戦後に活発な活動を再開し、元農民組合幹部とともに台湾農民協会を組織したほか、三民主義青年団高雄分団書記、台湾革命先烈遺族救援会総幹事などに就任した。二・二八事件以後には地下活動に身を投じ、中国共産党（以下、中共）の「台湾省工作員会」の書記として「山地工作」に携わった。1950年、国民党による「白色テロ」が激しさを増す状況の中で逮捕され、翌年、銃殺された⁶。

簡吉の第五子である簡明仁は、二・二八事件の1ヶ月あまりのちに生まれた。幼少時の生活は貧窮を極めたが、苦学して69年に交通大学電子工程系を卒業、70年にカリフォルニア大学バークレー校に留学した。留学のための資金は、簡吉の弟簡新發が「祖産」を売却して、簡吉の受けとるべき部分を長男簡敬に譲与したことによって得られた。留学中に王雪齡（台湾プラスチック・グループの創業者王永慶の娘）と知り合い結婚、79年に台湾に戻り、翌80年に大衆コンピューター（大衆電脳）を創業した。大衆コンピューターは飛躍的に発展し、1992年には世界最大のマザーボードメーカーとなった⁷。

父親の逮捕当時3歳だった簡明仁に父親の記憶はなく、のちになって、指名手配中の父が夜中に人目を逃れて生まれたばかりの簡明仁を抱きしめて来たのを知ったという。少年時代には家族の中ですら政治犯として処刑された父の名前を出すことはタブーだったが、バークレーでの留学時代に資料調査や米国台湾学生会での見聞を通じて父のことを理解し始めた。さらに帰台後、母が仏教の経典を収めた黄色い風呂敷包みの中に父の「獄中日記」を隠し持っていたことを発見し、自ら白色テロの生存者の話を聞いたりする作業を通じて父の行動の意味を問直し、「歴史は一連の悲劇だ。誰を恨んでもしかたない。ただ、歴史の真相を取り戻し、悲劇が繰り返されないことを望む」と感じるようになったという⁸。1982年には「財団法人簡吉陳何文教基金会」を創設、89年には「大衆教育基金会」に改変し、「僻地や山地の小・中学生、孤児院や貧民の子弟」を対象とした奨学金の支給、「二・二八事件を記念する文教活動」の援助などを行っている⁹。

本稿で簡吉・簡明仁親子の足跡に着目する理由の一つは、簡吉が抗日運動史において重要な位置を占めていることによる。だが、それだけでもない。以下に述べるように、この親子の足跡を一つの参照点とすることにより他のパネラーとの議論の場を構築できそうだという、さしあつ

ではプラクティカルな見通しにも基づいている。そうした見通しを持つことが可能であること自体、この親子の足跡が台湾住民として一定の「典型性」——この場合の「典型」は「平均値」という意味ではなく、むしろ同時代の状況をもっとも先鋭な形で表現する「極限值」という意味において——を備えていることを示していると言えるだろう。また、簡明仁の米国留学期にバークレー校の教授だった李遠哲元中央研究院長が、簡明仁夫妻の伝記に寄せた序文で次のように述べていることも着目される。「私はずいぶん前から簡明仁先生を知っている。彼の父親が台湾社会のために犠牲となったことについても、不十分ながら理解している。…簡明仁の故事は、台湾において苦難するあまたの子弟が時代の軛を振り切り、奮発向上し、ついに成功を収めた象徴である」¹⁰。

台湾社会の内部からこうした指摘もなされていることを確認した上で、以下においては、簡吉・簡明仁親子の足跡を参照点とした時にどのような研究課題が浮かび上がってくるか、ほかのパネラーの研究への問題提起という形式を通じて考えることにしたい。

2. 松田康博の研究に対して

松田康博『台湾における一党独裁体制の成立』は、中国大陆における国民党の経験も視野に収めつつ、党・政（行政院・各級政府などの主要国家機関）・軍・特（特務組織）それぞれの組織系統が複雑な相互作用を繰り返しながら「外来政権」としての統治体制を構築したプロセスを明らかにしたものである。緻密な資料調査に基づいて諸アクターの力関係を分析した叙述は説得力に富む。

松田は、国民党の統治体制下で「本省人」と呼ばれることになった台湾在来の住民の動向については、本省人エリートが求めた政治社会の「台湾化」政策が二・二八事件の善後策として一定の進捗を見せたにもかかわらず、国共内戦の敗北にともなう台湾の「中央化」により押し流されてしまったと論じている。また、県・市という地方レベルでは「本省人政治エリートの国民党化」が進むと同時に、「国民党の台湾化」が進み始めることなど、50年代における独裁体制の中に、のちの民主化のコースを特徴付ける要素がはらまれていたことを指摘している。これらはいずれも興味深く、重要な指摘である。そのことを確認した上で、本省人による政治的抵抗の意味合いが過少評価されているのではないかという疑問を提起したい。松田の著作では「体制に従順な本省人政治エリートを抱き込み」（246頁）という表現に象徴されるように、中国大陆で政治経験を積んだ「半山」は別として、「阿海」と呼ばれた本省人政治エリートは全体として「従順」で体制に「籠絡」されたことが強調されている。確かにそうした人物もいただろう。しかし、それでは、台共関係者の動向はどのように位置づけられるのか。台共について人名を挙げて具体的に述べているのは、次のような箇所限定される。「元抗日運動幹部であった蔡培火と蔣渭川は陳誠内閣で入閣し、左翼の新文化協会幹部であった鄭明祿や台湾共産党幹部の蔡孝乾は政権に取り込まれた。「半山」では、李友邦のように銃殺された者や、謝南光のように中華人民共和国に身を投じた者もいる」（203頁）。「蔡孝乾を始めとした多くの逮捕者が投降して転向し、自白したことにより、台共組織は壊滅状態になったのである」（361頁）。

この記述において台共は蔡孝乾によって代表されている。だが、蔡は、1928年に官憲による逮捕を恐れて台湾を脱出して以来、台共の党籍をはく奪されていた¹¹。その後、大陸で中共にしたがって「長征」に参加し、戦後も中共の党員として台湾に潜入していた。したがって、台共というより中共の党員であり、蔡によって台共を代表させるのは適切ではない。他方、台共のリーダーの中には、謝雪紅のように二・二八事件に際して武装闘争を指揮し、「中華人民共和国に身を投じた」者もいるし、簡吉のように台湾島内で中共の活動に参加して「銃殺された」者もいる。それにもかかわらず、本書では、謝雪紅や簡吉の名前は一度も登場せず、体制に籠絡されなかったのはもっぱら「半山」であるかのような印象を与える記述となっている。松田が指摘するように、国民党にしてみれば「中共の工作員を早期に発見して殲滅しないと、間近に迫る「台湾解放」作戦において、工作員の働き如何では台湾内部から崩壊する可能性さえあった」(355頁)という恐れが存在したはずである。だとすれば、国民党の動きを理解するためにも、本省人の共産党関係者の動向をより綿密に跡付ける必要があったのではないかと思う。

3. 佐藤幸人の研究に対して

佐藤幸人は、『台湾ハイテク産業の生成と発展』において、1980年代以降パソコン産業が台湾の経済発展を牽引し、半導体産業を含めたハイテク産業が製造業の最大セクターとなった事実を指摘した上で、半導体産業では国家と技術者たちのパートナーシップが重要な位置を占めたのに対して、パソコン産業では民間の中小企業が大きな役割を果たしており、企業間のネットワークが中小企業の誕生と発展を促進したと論じている。手法としては、普遍的な法則を志向する構造主義や合理主義のアプローチを批判し、行為主体——本書の場合は技術者や企業家——による発展経路の発見、創造、選択に着目する重要性を説いている。こうした手法を採用することにより、佐藤の研究は、政治研究や文化研究との対話の可能性を切り開いているといえる。

佐藤は、パソコンの発明前後にコンピューター産業の分野で創業した代表的企業として、施振栄によるエイサーや苗豊強による神通グループと並んで、簡明仁による大衆コンピューターを挙げ、次のように記している。「簡明仁の父は2.28事件に巻き込まれて刑死したため、その幼年時代、青年時代は本書で取り上げた企業家たちの中でもとりわけ厳しいものであった」(222頁)。「厳しい資金制約にもかかわらず、彼らは教育と起業以前の経験を通して得ていた能力を発揮して、入港点を見つけていった。…簡はアメリカで研究活動をしなが、ミニコンピューターの代理販売というビジネスを見つけた」(251頁)。「技術者及び企業家たちの多くがナショナリズムやそれに基づく使命感を持ち、それが起業等の行為の重要な動機付けとなっていたことが明らかになった。…大衆コンピューターの簡明仁がアメリカから台湾に戻った理由の1つは、コンピューターの活用が広まっていない台湾のために貢献したいという思いからだった」(263頁)。

佐藤は、簡明仁の父、すなわち、簡吉について「2.28事件に巻き込まれて刑死」と記している。この表現は、適切ではない。「刑死」の直接の文脈は二・二八事件というよりは「白色テロ」である上に、「巻き込まれて」という表現はもっぱら受動的な対応を示唆するからである。ただし、ここで問いたいのは、そのことよりも、簡明仁における「起業」の動機である。「ナショナリス

ムやそれに基づく使命感」という表現は、間違いではないにしても、曖昧と思える。「ナショナリズム」それ自体は、おそらく「高度成長」期の日本の技術者や企業家にも存在したであろうからである。台湾の場合、「外来政権」による専制的な統治体制の下で起業へと赴かせた「ナショナリズム」とはどのようなものだったのか、たとえば「台湾のために貢献したい」という簡明仁の言葉をどのように解釈すべきなのか、さらなる説明を求めたい。また、起業のための「入港点」を無事に探り当てたということだけでなく、暗中模索の中でなんらかの「入港点」を求めざるをえない切実さが存在したことが重要なのではないか。換言すれば、党や軍の幹部、高級官僚、大企業の役員といった、オーソドクスなエリート・コースが1960～70年代の台湾で本省人の青年に対してどの程度開かれていたかという事情を説明しなくてはならないのではないかと思う。

松田への問いにしても、佐藤への問いにしても、政治学プロパー、経済学プロパーの研究者から見れば、歴史的な課題意識に引きつけすぎの「ないものねだり」であることは自覚しているつもりである。それでも、以上の問いかけにおいて示したかったのは、同じように戦後台湾を分析対象としながら、また、同じように簡吉という人物に密接にかかわる主題をとりあげながらも、分析の対象や手法に大きな隔たりがあるということである。しかし、同時に、それぞれの研究が台湾社会の基底的な問題に接近しえている限りにおいて両者の研究は対話可能な広がりを持っており、筆者のように政治学・経済学の門外漢がその対話のアーリーナに参加することも可能なのだと考えたい。

4. 星名宏修の研究に対して

以下においては、日本植民地支配期の台湾史の捉え方をめぐる問題を、星名宏修と三尾裕子の研究に即して考えてみることにする。

星名については、「中国・台湾における「吼えろ中国」上演史：反帝国主義の記憶とその変容」（『日本東洋文化論集』第3号、1997年）という論文に着目したい。10年以上前の論文であり、近年の星名の論考——そこでは植民地台湾の沖縄人や、「混血」「通婚」をめぐる問題に着目している——とは異なるアプローチによるモノグラフだが、簡吉・簡明仁の足跡を一つの参照点として台湾史研究の課題を考える本稿の趣旨からすると、皇民化政策期の楊逵の活動に即して「反帝国主義の記憶」について論じた本論文は重要な意味を持つからである。

星名は、本論文において、ソヴィエトのアヴァンギャルド派の文学者トレチャコフが原作した演劇「吼えろ中国」の上演史に着目する。この演劇はトレチャコフが中国における実際の見聞をベースとして、「キリスト教宣教師の欺瞞、欧米人の中国人に対する徹底した蔑視、過酷な労働にあえぐ中国の苦力が最後に立ち上がる姿」（29頁）を描いたものである。1926年のモスクワでの上演を皮切りとして世界各地で上演されたこの演劇は、東京の築地小劇場では階級闘争の劇として受けとられ、30年代の中国では「抗日劇」として受けとられた。42年以降には「吼えろ中国」の改作が日本軍占領下の上海や北京でも上演された。この時の台本は大幅に改訂されており、クライマックスで群衆は「東亜の人民は団結せよ、英米を打倒せよ！」と叫ぶことになるのだが、それでも、「抗日劇」という観客の記憶を蘇らせた点で「抵抗」の意味合いが含まれていた可能

性があると星名は論じる。この劇はさらに、43年に皇民化政策下の台湾で楊逵による改訂版が上演された。その際には、舞台の出来事を特定の歴史的事件と明示的に結びつけることにより「反英米」を「反日」と読み替えるのは困難なように固定していた上に、台湾の観客には「抗日劇」としての「吼えろ中国」の記憶がなかったために、文字通り「打倒英米の宣伝劇として機能した」と星名は指摘し、「楊逵が抗日の姿勢を崩さなかった」という従来の評価は「歴史的事実ではない」と結論づける。

星名の論文において、本来「反帝国主義」のメッセージを伝えるはずであった演劇が、地域と時期によりその意味合いを変えて上演されたプロセスの分析は、スリリングである。また、「光復」後の台湾において「抗日」の記憶の相違が「本省人」と「外省人」の亀裂を深めていく伏線を示すものとしても興味深い。そのことを確認した上で問いたいのは、「楊逵が抗日の姿勢を崩さなかった」という評価が「歴史的事実ではない」として、それでは、「抗日の姿勢」が崩れていったプロセスをどのように理解し、記述すべきか、という問題である。これは、上記の論文ばかりでなく、星名のその後の研究、さらに星名以外の研究者によるものを含めて、台湾文学の研究でどのような解釈がなされてきたのかということを含めての問いかけである。

たとえば、日本台湾学会第7回大会では、星名が企画責任者となった分科会において、垂水千恵は「楊逵が想定した「読者大衆」が、日本語リテラシーを有する台湾人である以上、結果的に総督府のさらなる「国語」教育に依存せざるをえない」というアポリアを指摘している¹²。鋭い指摘だと思う。「読者」をめぐるこうした問題の指摘は、星名論文における「観客」のあり方という問題とも通底する。筆者としては、40年代に楊逵が改作した演劇の「観客」、30年代の楊逵の文学作品の「読者」の存在を、さらに20年代後半に農民組合——楊逵もその中核的メンバーのひとりだった——の講演会に集まった「聴衆」の存在とも対比すべきと感じている。農民組合の講演会では講演者は一般的に閩南語を用いて演説し、閩南語に詳しい臨検の警察官にもわからない表現で統治者を諷刺した。こうしたヴァナキュラーな言葉による親密な空間が暴力的に圧殺されたのちに文学活動がさかんになったわけだが、そこには、当初から日本語リテラシーをめぐるアポリアが孕まれていたことになる。この点に関連して、簡吉の「獄中日記」で、文学を介した抵抗を相対化する記述が見られることに着目したい。簡吉は、妻宛ての書簡で「問題は言葉（言葉が気に入るか入らぬか）にあるのではない。言葉に依つて慰安が得られる！問題が解決されるのでしたら世に難事とはなからう！」と書いている¹³。簡吉はまた、1927年に二林事件弁護のために「民衆の弁護士」と呼ばれた布施辰治を台湾に招いた際、「われわれは言葉と文字から受け取る快感に満足せず、それとは別に支配階級と組織の威力で戦うことに腹を決めました」と布施への書簡で記している¹⁴。「言葉」か「組織の威力」か、という問いかけは性急な政治主義とも思える。台共や中共という「組織」に賭けた行為が、銃殺という隘路にしか行き着かなかったことも、私たちは知っている。だが、台湾人による日本語文学の意味を評価するためにも、「文学」の外側に広がっていた絶望感ともいべきものを認識する必要があると思う。

5. 三尾裕子の研究に対して

三尾裕子の研究については、「植民地下の「グレーゾーン」における「異質化の語り」の可能性－『民俗台湾』を例に－」（『アジア・アフリカ言語文化研究』71号、2006年）を検討する。この論文は、三尾と五十嵐真子との共編である『戦後台湾における〈日本〉：植民地経験の連続・変貌・利用』と合わせて、いわば人類学と歴史学との接点にあたる領域を形づくるものであり、学際的な台湾研究の可能性を追求しようとする観点からしても、重要な研究動向と位置づけられるからである。

この論文において、三尾は、近年、川村湊・小熊英二など、人類学者・民俗学者ではない日本人研究者が『民俗台湾』の植民地主義的な性格を批判し、特に同誌の中心人物である金関丈夫のレイシズムや優生思想を問題化している状況を取りあげ、全体としてこれへの反論を展開している。すなわち、植民地における宗主国側の人間の評価について「構造的加害者の側に立つ人間であっても、彼らには多様な思いや植民地支配に対する不合理性への懸念がありえたのではないだろうか」（183頁）という問いをたて、金関についてはレイシストと断定できる根拠はないと論じる。また、楊雲萍など左翼運動とのかかわりを持った経験を持つ台湾人も『民俗台湾』に参加した事実を強調するとともに、戦後台湾の人びとがこの雑誌を戦時下における「良心」の表明とみなし、何度も復刻した事実を挙げて「政治的なイデオロギーの紆余曲折を越えて資料として歴史の風雪に耐えうる価値を持ちつづけている」（202頁）と評価している。

三尾の議論の中で、小熊らによる批判がいわば日本人の世界で自己完結してしまうひとりよがりな「自己批判」であり、当時の台湾、さらに戦後の台湾の人々にとっての『民俗台湾』の意味を見落としているという指摘は説得力がある。ただし、①雑誌関係者の意識（「台湾への愛」や「良心」）、②雑誌に記された記事の学術的価値、③1940年代前半におけるこの雑誌の歴史的な位置づけ、④戦後台湾における位置づけという問題は、それぞれ一応は独立した次元の問題とみなすべきである。それにもかかわらず、三尾の論文においてはかならずしも自覚的でないまま一つの次元の評価が他の次元の評価に横滑りしていると感じられる。

特に気にかかるのは、③である。それぞれの時代状況の中でどのような発言が許容され、『民俗台湾』の言論はその許容範囲のどこに位置付くのか、より正確に見定める必要がある。三尾は、『民俗台湾』を舞台として活動した日本人——金関丈夫や国分直一など——の言論は当時としてはぎりぎりのもの「良心的」なものとして評価している。だが、近藤正己の研究では、戦時期において台湾人に対して非妥協的な強硬論が根強く存続する一方、徴兵制施行が具体化する状況下では差別撤廃という声も大きくなり、警察による不法拘禁・人権蹂躪を批判する日本人弁護士もいるなど「台湾人に対する植民者の考え方は二極分解」したと論じられている¹⁵。『民俗台湾』関係者の議論は少なくともそれほど突出したものではなかったと思われる。それにもかかわらず、雑誌関係者の主観的「善意」（①）や、戦後における台湾人の受けとめ方（④）にかかわる評価を横滑りさせることで、『民俗台湾』をめぐる日本人の役割の過大に評価することになっていると感じる。

三尾が、「植民地支配者と植民地支配下に置かれた人々を邪悪な加害者と無垢の被害者」とに明

確に区分」(182頁)するという二分法を批判している点も、一応は首肯できるが、疑問を感じる部分もある。三尾の指摘するように、差別は常に重層的であり、民族の軸だけでなく、階層やジェンダーの軸をめぐって輻輳しており、支配者たる日本人も、被支配者たる台湾人も、決して一枚岩ではなかった。ただし、軍隊や警察という暴力装置が基本的に被支配者たる台湾人を標的として存在していたことを見過すべきではない。たとえば、1937年に台湾軍参謀長秦雅尚が起草した文書では、台湾人による組織を「一挙二潰滅」する方策は「私生活方面ニ於テ同士ノ獲得ヲ図」るように追い込むだけであるから、「殲滅的弾圧ヲ準備シツツ寧口或ル程度黙視スルヲ可トセン」と記している¹⁶。たとえ潜在的な形態に止まる場合でも、「殲滅的弾圧」は常に準備されていたのである。軍隊や警察が自分たちを守ってくれると感じる人びとと、その銃口は自分たちに向けられていると感じざるをえない人びとの意識の落差は、私たちが想像するよりもはるかに大きかったのではないだろうか。たとえば、金関らの起草した『民俗台湾』の「趣意書」に対して、楊雲萍が、「冷い高飛車」な態度を批判したことが知られている。この出来事について、三尾は「当初の楊の批判以外には、『民俗台湾』の存在に亀裂を生むような事態は発生しなかったことは特筆すべき」(200頁)と記している。だが、植民地支配においてもともと植民者と被植民者という「亀裂」が構造化されていることを看過すべきではない。そうした社会において、楊雲萍による批判のように「亀裂」が表面化しえたことこそむしろメディアの「自由度」を示すものとして「特筆」すべきであり、それ以外に表面化しえなかったことを問題視すべきなのだと思う。

このように述べたからと言って、植民地台湾の日本人はすべて「邪悪な加害者」だったと述べたいわけではない。もちろん、相対的に「良心的」な日本人もいただろう。問題はその「良心的」言動の質であり、また、その「良心的」言動が統治体制とどのような関係にあったのかということである。たとえば、簡吉の要請に応じて台湾農民組合員の弁護にあたった布施辰治はのちに弁護士資格を剥奪され、蔡培火の活動を支援した矢内原忠雄は東京帝国大学教授の職を追われた。あるいは、張季琳の研究が明らかにしているように、楊逵を経済的に支援し、魯迅全集を彼にもたらした警察官入田春彦は、自殺へと追い込まれた¹⁷。『民俗台湾』における日本人と台湾人の関係は、こうした流れをふまえるならば、連帯関係の質という点においても、日本人が直面した困難の度合いという点においても、やはり戦時期特有の限定を強く受けていたと評価すべきだと思う。

まとめに代えて

以上のコメントを通して、筆者が示したかったことは、一見すると手法も対象も全く異質に見える研究も、同じ台湾という地域を対象とする以上、相互に重なり合う問題意識を持ちうるはずだということである。時期の問題について言えば、「現実に台湾に住む人々」の歴史が1945年や49年で途切れてしまうわけではないという指摘の大切さを改めて思いおこしたい。星名の研究も、三尾の研究も、さしあたって戦前の植民地期のことを対象としたものだが、45年以降のこと

を考える上でも重要な知見を含んでいる。あるいは、そうしたことが可能になる方向で戦前のことが論じられている。それは、大切なことだと思う。ただし、現実に45～49年前後の時代の激動の中で暴力的に人生を断ち切られた人々が少ない以上、歴史の連続性に関する松田の指摘を具体化していくためには、二代、あるいは三代以上にわたる家族史的なアプローチが必要なのではないかと思う。

本稿では簡吉・簡明仁親子の足跡を一つの参照点としたが、参照点を変えることにより、ここで言及した個々の研究の意味合い、相互の関係も微妙に変わってくることだろう。たとえば、「外省人」の親子を参照点とするならば問題の構成そのものが大きく変わるであろうし、二代ではなく三代へと視点を広げることによって清朝時代の台湾からの連続性について考えてみることも必要だろう。本稿において簡吉・簡明仁親子の足跡を参照点とすることにより浮かび上がってきたのは、「抗日」あるいは「反帝国主義」という「古典的」主題が今日でもやはり基底的なテーマの一つだということである。この10年間は台湾史研究が一定の市民権をえた時代であると同時に、台湾史をめぐる歴史修正主義的な議論——ここでその具体例を挙げる必要はないだろう——が大きな影響力を持ち始めた時期でもある。それだけに、「抗日」あるいは「反帝国主義」という観点からの台湾史の再構築が必要であると筆者は感じている。だからといって、もとより、台湾史を「抗日」という単色なテーマで塗りつぶせばよいというわけではない。狭義の政治運動に止まらず、「抵抗」には多様な形態があることにも留意しなくてはならない。本稿で示したのは、現代のハイテク企業の創業者という、一見すると「抗日」とは縁もゆかりもないと思える人の足跡にも「抗日」という主題が関係しているという事実の重みであり、この重みを認識することが戦前と戦後を一貫した形で台湾史を把握するための一つのポイントになりうることである。皮肉なことに戦後の台湾では「抗日」が国民党の正統な歴史観とされる一方で、日本の植民地支配を体験した人びとの複雑な経験は精神的な「奴隷化」を意味するものとして否定的に評価されてきたわけだが、体制の掲げてきた「抗日」とは異なる次元での「抗日」の地下水脈のようなものを見出しうるのではないかと筆者は考えている。

最後に、あらためて若林正丈による本学会創立大会における司会者冒頭発言に立ち返ることにしたい。若林は「戦後台湾研究の問題意識」として、「(経済) 発展」系列、「民主化」系列、「アイデンティティ」系列という3つの系列があると論じている¹⁸。本稿に即して言えば、佐藤は「発展」系列、松田は「民主化」系列、星名と三尾は「アイデンティティ」系列の研究ということになるだろう。重要なことは、この三系列の絡み合い方そのものである。たとえば、本稿における佐藤への問いかけは「発展」系列の問題意識にどのように「アイデンティティ」「民主化」系列の問題意識を組み込むのかということであり、星名や三尾への問いかけは「アイデンティティ」と「民主化」の関係を問うことでもある。かつては「帝国主義」と言えば、それだけで三系列の問題を一挙に説明できたかのように思い込める時代があったわけだが、今日ではこうした言葉は乱反射し、鮮明なイメージを結びにくい。だからこそ、個々の具体的な研究に即して三系列の絡み合い方を問う議論が必要であり、そのために日本台湾学会という場が必要とされているのだと思う。

注

- 1 若林正文「『台湾研究』のイメージ」(『日本台湾学会報』創刊号、1999年)、2頁。
- 2 台湾における台湾史研究については、さしあたって若林正文監修『台湾における台湾史研究－制度・環境・成果：1986-1995』(財団法人交流協会、1996年)、林玉茹・林毓中(森田明訳)『台湾史研究入門』(汲古書院、2004年)を参照。
- 3 松田康博『台湾における一党独裁体制の成立』慶應義塾大学出版会、2006年、2頁。
- 4 こうした相互触発的なアリーナの設定を試みた編著として、呉密察・黄英哲・垂水千恵編『記憶する台湾：帝国との相剋』(東京大学出版会、2005年)、五十嵐真子・三尾裕子編『戦後台湾における〈日本〉：植民地経験の連続・変貌・利用』(風響社、2006年)などを挙げることができる。いずれも興味深い著作であるが、全体として広義の文化研究に偏っており、政治研究、経済研究プロパーとの交わりは今後の課題となっている。
- 5 「農組宣言案第二審」(『台湾民報』第291号、1929年12月15日)。
- 6 以上の略歴は、主に韓慧玲『播種集：日拠時期台湾農民運動人物誌』(台北、簡吉陳何文教基金会、1997年)の記述による。
- 7 周正賢『従大衆出発：簡明仁和王雪齡的故事』台北、聯経出版、2000年。
- 8 劉佩修「簡明仁花三十年找回消失の父親」(『商業週刊』第922期、2005年)。
- 9 大衆教育基金会のホームページ (<http://www.fic.org.tw/index.html>、2008年6月1日確認)を参照。
- 10 李遠哲「推薦序」、前掲『従大衆出発』i頁。なお、2005年には『簡吉獄中日記』が中央研究院台湾史研究所から刊行されるが、前掲劉佩修「簡明仁花三十年找回消失の父親」によれば、この出版は李遠哲中央研究院院長(当時)の尽力を得てなされたものという。
- 11 台湾総督府警務局『台湾総督府警察沿革誌第二編 領台以後の治安状況(中巻)』(1939年)668～669頁。なお、謝紅雪と蔡孝乾の関係については、陳芳明(森幹夫訳、志賀勝監修)『謝雪紅・野の花は枯れず』(社会評論社、1998年)を参照。
- 12 星名宏修「1930年代から40年代における台湾文学界の変容の諸相－「読者」「大衆」「文壇」をキーワードとして－」(『日本台湾学会ニュースレター』(第10号、2005年))。
- 13 簡吉著(簡敬他訳、陳慈玉校註)『簡吉獄中日記』(中央研究院台湾史研究所、2005年、237頁)。なお、布施辰治と簡吉の関係については、拙稿「台湾史をめぐる旅(六) 布施辰治と簡吉」(『前夜』7号、2006年4月)という短いエッセイで論じたことがある。
- 14 布施柑治『布施辰治外伝 幸徳事件より松川事件まで』未來社、1974年、44頁。
- 15 近藤正己「植民者の戦争経験」(『岩波講座アジア・太平洋戦争4』岩波書店、2006年)24～25頁。
- 16 台湾軍参謀長秦雅尚陸軍次官梅津美治郎宛「台湾輿論ニ関スル件通牒」1937年7月27日、『密大日記』1937年、防衛研究所図書館所蔵。
- 17 張季琳「楊達と入田春彦」(『日本台湾学会報』第一号、1999年)。
- 18 前掲、若林「『台湾研究』のイメージ」、3頁。

資料1：日本における台湾史関係図書目録

【凡例】

- ・1998年から2008年5月までに日本で刊行された台湾史関係の学術書(単著のみ)を対象とした。新書のような入門書・啓蒙書、編著、文学作品の翻訳は原則として含めていない。
- ・「台湾史研究」の範囲を規定するにあたって、およそ1980年代以前の記述を含むものに関しては「歴史研究」としての性格を持つと判断して含めている。朝鮮や満洲など他の旧植民地との比較や関連について論じた研究も含めている。
- ・副題の表記は「-」で統一した。
- ・[政治史][経済史][教育史・宗教史・言語史][社会史・女性史・民族誌][文学史]として暫定的なジャンル分けをしたほか、[翻訳書]を一つのジャンルとして、それぞれのジャンルの中では年代順に配列した。
- ・「あとがき」などから学位論文を改稿して出版したものと判断できる場合には、「博士論文書誌データベース

- ス」（国立国会図書館・国立情報学研究所）により確認の上、※のあとに学位授与大学と授与年を記した。
- ・『日本台湾学会会員名簿 2006年度版』に名前の掲載された学会会員については、著者名に下線を付した（故石田浩前理事長に関しては、当該名簿にはお名前がないが、下線を付した）。
 - ・本目録の作成にあたって、日本台湾学会のホームページにアップされている「戦後日本における台湾関係文献目録」（<http://www.koryu.or.jp/taiwanstudies.nsf>）なども参照したが、なお遺漏が多いことと思う。今後、訂正していきたい。

【政治史】

- ・若林正文『台湾抗日運動史研究 増補版』研文出版、2001年 ※東京大学：1985年
- ・戴天昭『台湾戦後国際政治史』行人社、2001年
- ・森宣雄『台湾／日本－連鎖するコロニアリズム』インパクト出版会、2001年
- ・何義麟『二・二八事件－「台湾人」形成のエスノポリティクス』東京大学出版会、2003年 ※東京大学：1999年
- ・林泉忠『「辺境東アジア」のアイデンティティ・ポリティクス－沖縄・台湾・香港』明石書店、2005年 ※東京大学：2002年
- ・戴天昭『台湾法的地位の史的研究』行人社、2005年
- ・松田康博『台湾における一党独裁体制の成立』慶應義塾大学出版会、2006年 ※慶應義塾大学：2001年
- ・梶居佳広『「植民地」支配の史的研究－戦間期日本に関する英国外交報告からの検証』法律文化社、2006年 ※立命館大学：2005年
- ・岡本真希子『植民地官僚の政治史－朝鮮・台湾総督府と帝国日本』三元社、2008年
- ・若林正文『台湾の政治－中華民国台湾化の戦後史』東京大学出版会、2008年
- ・春山明哲『近代日本と台湾－霧社事件・植民地統治政策の研究』藤原書店、2008年

【経済史】

- ・石田浩『アジアの中の台湾－政治・経済・社会・文化の変容』関西大学出版部、1999年
- ・石田浩『台湾経済の構造と展開－台湾は「開発独裁」のモデルか』大月書店、1999年
- ・松浦章『清代海外貿易史の研究』朋友書店、2002年
- ・北波道子『後発工業国の経済発展と電力事業』晃洋書房、2003年
- ・河原林直人『近代アジアと台湾－台湾茶業の歴史的展開』世界思想社、2003年
- ・園田哲男『戦後台湾経済の立証的研究』八千代出版、2003年
- ・朝元照雄『開発経済学と台湾の経験』勁草書房、2004年
- ・石田浩『台湾民主化と中台経済関係－政治の内向化と経済の外向化』関西大学出版部、2005年
- ・松浦章『近代日本中国台湾航路の研究』清文堂出版、2005年
- ・佐藤幸人『台湾ハイテクと産業の生成と発展』岩波書店、2007年

【教育史・宗教史・言語史】

- ・游佩芸『植民地台湾の児童文化』明石書店、1999年 ※お茶の水女子大学：1996年
- ・山本礼子『植民地台湾の高等女学校研究』多賀出版、1999年
- ・陳培豊『「同化」の同床異夢－日本統治下台湾の国語教育史再考』三元社、2001年 ※東京大学：2000年
- ・坂口直樹『戦前同志社の台湾留学生－キリスト教国際主義の源流をたどる』白帝社、2002年
- ・松田吉郎『台湾原住民と日本語教育－日本統治時代台湾原住民教育史研究』晃洋書房、2004年
- ・菅浩二『日本統治下の海外神社－朝鮮神宮・台湾神宮と祭神』弘文堂、2004年 ※國學院大學：2004年
- ・青井哲人『植民地神社と帝国日本』吉川弘文館、2005年 ※京都大学：1999年
- ・劉麟玉『植民地下の台湾における学校唱歌教育の成立と展開』雄山閣、2005年 ※お茶の水女子大学：2002年
- ・石剛『日本の植民地言語政策研究』明石書店、2005年
- ・岡部芳広『植民地台湾における公学校唱歌教育』明石書店、2007年 ※神戸大学：2004年
- ・宮崎聖子『植民地期台湾における青年団と地域の変容』御茶の水書房、2008年 ※お茶の水女子大学：2004年
- ・北村嘉恵『日本植民地下の台湾先住民教育史』北海道大学出版会、2008年 ※北海道大学：2006年

【社会史・女性史・民族誌】

- ・植野弘子『台湾漢民族の姻戚』風響社、2000年 ※東京大学：1998年
- ・田村志津枝『はじめに映画があったー植民地台湾と日本』中央公論新社、2000年
- ・洪郁如『近代台湾女性史ー日本の植民統治と「新女性」の誕生』勁草書房、2001年 ※東京大学：2001年
- ・竹中信子『植民地台湾の日本女性生活史』昭和篇上・下、田畑書店、2001年
- ・曾山毅『植民地台湾と近代ツーリズム』青弓社、2003年 ※立教大学：2003年
- ・松田京子『帝国の視線ー博覧会と異文化表象』吉川弘文館、2003年 ※大阪大学：1997年
- ・中村勝『台湾高地先住民の歴史人類学ー清朝・日帝初期統治政策の研究』緑蔭書房、2003年
- ・山路勝彦『台湾の植民地統治ー〈無主の野蛮人〉という言説の行方』日本図書センター、2004年
- ・浅野春二『台湾における道教儀礼の研究』笠間書院、2005年 ※國學院大學：2001年
- ・上水流久彦『台湾漢民族のネットワーク構築の原理ー台湾の都市人類学的研究』溪水社、2005年 ※広島大学：2001年
- ・飯島渉『マラリアと帝国ー植民地医学と東アジアの広域秩序』東京大学出版会、2005年
- ・坂野徹『帝国日本と人類学者ー一八八四年ー一九五二年』勁草書房、2005年 ※東京大学：2005年
- ・五十嵐真子『現代台湾宗教の諸相ー台湾漢族に関する文化人類学的研究』人文書院、2006年 ※神戸学院大学：2005年
- ・朱徳蘭『台湾総督府と慰安婦』明石書店、2005年
- ・大友昌子『帝国日本の植民地社会事業政策研究ー台湾・朝鮮』ミネルヴァ書房、2007年 ※長崎純心大学：2006年
- ・胎中千鶴『葬儀の植民地社会史ー帝国日本と台湾の〈近代〉』風響社、2008年 ※立教大学：2002年
- ・中村勝『「愛国」と「他者」ー台湾高地先住民の歴史人類学Ⅱ』ヨベル、2007年
- ・山路勝彦『近代日本の植民地博覧会』風響社、2008年
- ・西沢泰彦『日本植民地建築論』名古屋大学出版会、2008年
- ・野村厚志『イノシシ狩猟の民族考古学：台湾原住民の生業文化』御茶の水書房、2008年 ※総合研究大学院大学、2003年

【文学史】

- ・藤井省三『台湾文学この百年』東方書店、1998年
- ・黄英哲『台湾文化再構築の光と影ー魯迅思想受容の行方』創土社、1999年 ※立命館大学：1996年
- ・丸川哲史『台湾・ポストコロニアルの身体』青土社、2000年
- ・張季琳『台湾プロレタリア文学の誕生ー楊逵と「大日本帝国」』東京大学大学院人文社会系研究科（東京大学大学院人文社会系研究科博士論文ライブラリー）、2001年 ※東京大学：2000年
- ・垂水千恵『呂赫若研究』風間書房、2002年 ※お茶の水女子大学：2001年
- ・中島利郎『日本統治期台湾文学研究序説』緑蔭書房、2004年
- ・岡崎郁子『黄霊芝物語ーある日文台湾作家の軌跡』研文出版、2004年
- ・松永正義『台湾文学のおもしろさ』研文出版、2006年
- ・丸川哲史『台湾における脱植民地化と祖国化ー二・二八事件前後の文学活動から』明石書店、2007年 ※一橋大学：2006年
- ・上田哲二『台湾モダニズム詩の光芒』三恵社、2007年

【翻訳書】

- ・陳明通（若林正丈監訳）『台湾現代政治と派閥主義』東洋経済新報社、1998年（原著1995年）
- ・陳芳明（森幹夫訳、志賀勝監修）『謝雪紅・野の花は枯れず』社会評論社、1998年（原著1991年）
- ・M. ウルフ（中生勝美訳）『リン家の人びとー台湾農村の家庭生活』風響社、1998年（原著1968年）
- ・鄧相揚（下村作次郎・魚住悦子訳）『抗日霧社事件の歴史ー日本人の大量殺害はなぜ、おこったか』日本機関紙出版センター、2000年（原著1998年）
- ・鄧相揚（下村作次郎監修、魚住悦子訳）『植民地台湾の原住民と日本人警察官の家族たち』日本機関紙出版センター、2000年（原著1998年）
- ・葉石濤（中島利郎・澤井律之訳）『台湾文学史』研文出版、2000年（原著1987年）
- ・鄧相揚（下村作次郎監修、魚住悦子訳）『抗日霧社事件をめぐる人びとー翻弄された台湾原住民の戦前・戦後』日本機関紙出版センター、2001年（原著1999年）

- ・張宗漢（石田浩監訳）『光復前台湾の工業化』財団法人交流協会、2001年（原著1951年）
- ・林鐘雄（石田浩監訳）『台湾経済発展の歴史的考察1895～1995（増訂版）』財団法人交流協会、2002年（原著1995年）
- ・彭瑞金（中島利郎・澤井律之訳）『台湾新文学運動四〇年』東方書店、2005年（原著1998年）
- ・謝國興（石田浩監訳）『台南幫－ある台湾土着企業グループの交流』財団法人交流協会、2005年（原著1999年）
- ・黄富三（石田浩監訳）『女工と台湾工業化』財団法人交流協会、2006年（原著1977年）
- ・フェイ・阮・クリーマン（林ゆう子訳）『大日本帝国のクレオール－植民地期台湾の日本語文学』慶應義塾大学出版会、2007年（原著2003年）
- ・ステファン・コルキュフ（上水流久彦・西村一之訳）『台湾外省人の現在－変容する国家とそのアイデンティティ』風響社、2008年（原著2004年）

